

# 「ケベック州のフランス語について」(加筆修正版)

2009年6月19日(金) 仏語学仏文学研究会にて発表

廣松 勲

---

はじめに：フランス語圏文学における「言語的超意識」(Lise Gauvin)

## I ケベック州の歴史的概観

1. ニューヴェル・フランスの誕生：「発見」(1534年)からイギリス統治(1763年)まで
2. イギリス統治下における「生き残り」とナショナリズムの勃興(18世紀末-20世紀)
3. 「静かな革命」(1960年代)から「フランス語憲章」(1977年)の成立へ

## II ケベック・フランス語の文法

1. ケベック語の例 a) 新聞漫画 b) 「Gad parle français」(2分)  
c) 映画『Bon Cop Bad Cop』からの抜粋(5分)
2. 発音 a) Voyelles b) Consonnes c) Anglicisme
3. 語彙 a) Mots et locutions figées québécois b) Jurons c) Féminisation d) Anglicisme
4. 統辞 a) Vouvoyer ou tutoyer? b) «-tsi»/«-tsu» c) Interrogation d) Impératif  
e) Futur proche

結論：「単数形のフランス語」から「複数形のフランス語」へ

---

## はじめに：フランス語圏文学における「言語的超意識」(Lise Gauvin)

みなさん、こんにちは。廣松勲です。今日はよろしくお願ひいたします。今回お配りした資料は、9ページで、一まとめになっています。「発表の流れを書いた表紙」を除いて、「資料1～7」まで番号が振られています。発表の進行に合わせて、ご覧頂く形になります。

まずはじめに、発表の前提として、フランス語圏文学という分野で一定の不変性を持つと考える言語状況について、簡単に検討しておきましょう。フランス共和国の外部にあるフランス語圏において、作品制作上の「言語選択」は、当該地域に関わるあらゆる作家、研究者にとって避けては通れない問題です。つまり、「フランス語圏」言い換えるなら「フランスの旧植民地」(全ての地域ではないが)においては、「文学作品の制作と使用言語との関係」が、全くもって自明のものではありません。フランス本土の作家たちが殆ど念頭に置くことのないこのような問題、つまり「いかなる言語で文学作品を書くのか？」という問いが、切実なものとして存在しているのです。一体、どうしてなのでしょう？それは、主に次のような理由によります。当該地域では、多くの場合、「標準フランス語」が高い社会的地位を保持し(上位言語 *acrolect*)、その他の言語が「下位言語 *basilect*」として認知されるという、「二言語併用状態、ダイグロシヤ *diglossie*」の只中で、作家たちは執筆を続けなくてはなら

ないのです（ダイグロシアについては、この言語状況の研究の第一人者 Charles A. Ferguson の論文を参照）。例えば、クレオール諸語とフランス語、アラビア諸語とフランス語、アフリカ諸語とフランス語、そしてもちろん今日取り上げることになる、ケベックのフランス語と標準フランス語の言語的關係も、下位言語の話者に、それぞれ同じように避け難く、同時に解決困難な葛藤を絶えず生み出しています。

モントリオール大学の教授リズ・ゴーヴァン氏は、このようなフランス語圏作家の使用言語への身構えを「言語的超意識 *surconscience linguistique*」と呼んでいます（*Vocabulaire des études francophones*, 2005, p.172-174.）。この地域の作家たちにとって、「フランス語を文学言語として選択した」ということ自体が、常に内省的に／自己参照的に検討されなくてはならない状況にあるのです。別の視点から言うなら、執筆言語の選択は、すでに作者の文学的姿勢の表れなのです。それゆえ、彼らの文学言語への思考は、時に前衛的で非常にラディカルなものとなり、それが近年のフランス語圏文学の豊饒性の基層低音一つとなっていると指摘することは、難しくありません。

みなさんには、是非ともこのようなフランス語圏の言語的状況を念頭に置いて頂いた上で、今日の発表をお聞きいただけたらと思っています。（補足：「言語的超意識」とは、端的に言って、旧植民地出身者に共通するとされる、使用言語に対するメタレベルの意識を指す。ゴーヴァン氏は、作品内外におけるこのような意識の表出の検討を研究課題としている。／今井先生の質問への解答。）

さて、本日会場にいらっしゃっている殆どの方は、「フランス語」に何らかの形で接している方たちだと思います。私が今日取り上げる「ケベック州のフランス語」、つまり「ケベック語」は、みなさんが日ごろ接している「標準フランス語」とは、かなり異なる言語です。また、カナダ連邦全体からみれば、「英語」に対して、フランス語は社会的価値の低い「下位言語」とされているのが現状です。つまり、カナダ全体でもケベック州だけでも、「二言語併用状態、ダイグロシア」の状況にあるのです。ではどうして、このような状況になったのか？また、ケベック・フランス語は、標準フランス語といかなる差異を含んでいるのか？このような点を、本日の発表では明らかにしたいと思っています。（補足：「英語」まで視野に入れるとすれば、*Diglossie* ではなく、むしろ「*Triglossie* 三言語併存状況」、あるいは「*Tetraglossie* 四言語併存状況」という言葉の方が、正確かもしれない。いずれにせよ、或る言語をその社会的位置から検討するためには、理念形としての上位言語と下位言語という両極の間に広がる「言語連続体 *continuum langagier*」あるいは「中間言語 *interlect*」も、念頭に置くべきでしょう。）

発表の流れは、資料の表紙にも書いてありますが、次の通りです。まず始めに「1. ケベック州の歴史」を概観した上で、次に「2-1. ケベック語の例」を実際に見聞きして頂きます。その後、より詳細に「2-2～4 ケベック語の文法」を見ていきたいと思っています。

## I ケベック州の歴史概観

### 1. ニューヴェル・フランスの誕生：「発見」（1534年）からイギリス統治（1763年）まで

まずは、ケベック州がいかなる地理的位置にあるのかを簡単に見てみましょう。資料1（『ケベックを知るための54章』、14頁）をご覧ください。フランス語圏ケベック州は、カ

ナダ連邦の東部を成す地域で、面積は日本のほぼ 4.5 倍もある州です。総人口約 780 万のうち、ほとんどが「Francophone フランス語話者」で、特に最大都市のモントリオールは、パリに次ぐ世界第二のフランス語圏都市といわれています。カナダ連邦は 1931 年より独立国家ではありますが、イギリス版の「フランコフォニー Francophonie」組織、つまり「コモン・ウェルス Common Wealth」の一員であり、それ故、国家元首は今もなおエリザベス女王です。

ケベック州のように、フランス語話者が北米大陸に存在すること自体、あまり知られていない事実かも知れません。実際、この点が、ケベックのフランス語話者が、最も悩むところでもあるようです。ちなみに、**資料 2** (『ケベックを知るための 54 章』、13 頁、38 頁、43 頁の図)の一番左にある、大きめの地図を見れば分かりやすいですが、ケベック州以外にも、その東側にある「ニュー・ブランズウィック州」や「ノヴァスコシア州」もフランス語圏の州であり、またアメリカ合衆国の「ルイジアナ州の西部」にも、フランス語話者が存在します。さらに、「赤毛のアン」で有名な「プリンス・エドワード島」にも、ごく少数ですがフランス語話者が存在します (長谷川秀樹氏の HP 参照)。どうして英語圏の世界に、このようにフランス語圏が「存在」、否、むしろ「混在」しているのでしょうか？

この「フランス的事実」は、カナダの歴史を紐解けば、明白になる事柄です。ここからは、主に**資料 3** (『ケベックを知るための 54 章』、374 頁～377 頁)の年表をご覧になりながら、説明をお聞きください。まず、規模は時期によってまちまちでしたが、現在のケベック州周辺からアメリカ合衆国のルイジアナにかけては、かつては「Nouvelle France」と呼ばれるフランスの植民地でした。当該地域がフランス人によって発見されたのは、1534 年のことです。まずジャック・カルティエという探検家が発見、探索し、その後 1608 年には、同じく探検家サミュエル・ド・シャンプランが現在のケベック州の州都であるケベックのあたりに要塞基地を建設しました。この双方とも、フランス史ではそれほど有名ではありません。それを示すかのように、彼らの彫像は、パリのグラン・パレの裏側に、ひっそりと隠れるように立っています。ちなみに、2008 年はケベック市創設から 400 年に当たります。

さて、この Nouvelle France は、カルティエによる発見とケベック建設の後、1663 年にはフランスの国王直轄領となります。しかし、それと同時に、イギリスとフランスとの植民地領土拡張の戦争に巻き込まれていきます。その結末は、現在もケベック社会に色濃く影響を残すこととなります。つまり、フランスはイギリスの海軍が代表する軍事力に敗北し、1763 年のパリ条約にて、Nouvelle France をイギリスに割譲したのです。この際、ハイチと Nouvelle France のどちらかを選択するよう迫られたフランス国王は、当時サトウキビなどで産業が発達し、最も裕福な植民地の一つだった「カリブ海の黒い真珠、ハイチ」を選んだ、という経緯があります。(補足：現在、世界最貧国の一つとなっているハイチは、1492 年にコロンブスによって「発見」されたカリブ海域にあるサン・ドマング島の西部を占める国である。「発見」以後、西欧宗主国の間で取り合いとなるが、結局フランスの有する「最も豊かな」植民地となる。フランスの 17-18 世紀の経済的・文化的栄華は、ハイチを代表とする海外植民地からの甚大なる搾取によって支えられることとなる。1804 年にフランスより分離独立し、史上初の黒人共和国となる。)

この割譲は、多くのケベック地域の住民にとっては、正しくイギリスによる植民地化、いわば「征服」であり、また同時に、北米に残された自分たちはフランスに捨てられたのだ、という意識が植え付けられることとなります。

## 2. イギリス統治下における「生き残り」とナショナリズムの勃興（18世紀末－20世紀）

この1763年からのち、ほぼ100年に渡って、現在のケベック地域はフランス本土との交流を断つこととなります。この間、ケベック州の住民にとって、最も重要な事柄は、英語やイギリス文化など、「イギリス的なもの」の只中で、フランス系住民として「生き残り」ということでした。この英語圏文化における「生き残り」という姿勢は、その後も消えることなく、少なからず現在も存在する、ケベック社会の文化的・言語的態度だといえます。また、近年グローバリゼーションによる英語使用の世界的拡大に対し、各国が様々な措置を取っていますが、ケベックは既に200年もの間、このような問題に取り組んできたと考えることも可能です。

さて、このような「生き残り」の姿勢は、必然的に、「イギリス文化／言語」と「自らのフランス系文化／言語」との差異を強調することに繋がっていきました。換言するならば、この18世紀末から、様々な形でナショナリズム運動が活発化することになるのです。さらに言えば、これ以降のケベック社会を考えることは、そのナショナリズムの変容を考察することにほぼ重なると言っても、過言ではありません。

ケベック政治の研究者、古地順一郎氏は、このようなケベック地域におけるナショナリズムを、3つのタイプに分けています（『ケベックを知るための54章』、75頁～82頁）。まず第一に、18世紀末から19世紀前半にかけての「カナディアン・ナショナリズム」。第二に、19世紀半ばから20世紀半ばに勃興した「フランス系カナダ・ナショナリズム」。そして第三に、1950年代から現在に至る「ケベック・ナショナリズム」です。イギリスへの割譲を切っ掛けに生じたナショナリズムは、「イギリス人」に対して、「自らをカナダ人と意識するフランス系エリート住民」によって主導された、第一期のナショナリズムでした。

第二のナショナリズムを考察するには、カナダ連邦全体の歴史を考えてみる必要があります。つまり、1867年にイギリスの北米植民地の内、4州が、「イギリス連邦カナダ自治領」となったのです。このカナダ全体の政治的地位の向上は、しかしながら、ケベック地域のフランス系住民には、イギリスによる更なるフランス文化の「征服」、あるいは「破壊」を目論むものとして把握されました。その結果、今回は、前回よりもさらに限定的に「フランス系カナダ人」としてのナショナリズムが発達することとなります。この「フランス系カナダ人 Canadian français」という表現は、その後、60年代までケベック地域の住民を指し示すこととなります。

## 3. 「静かな革命」（1960年代）から「フランス語憲章」（1977年）の成立へ

第三のナショナリズムは、第二次大戦後に生じることとなります。このナショナリズム運動が以前のものとは異なる点は、今回はケベック地域の住民が、自らが「フランス系文化を担ったケベック人」であることを明確に意識し始めたという点にあります。

その最も大きな原動力となったのは、60年代以降に展開した、大規模な社会変容です。主に高度産業化、脱宗教化、政治的主権の要求を特徴とする、この時期の急激な社会変容は、その後「静かな革命 Révolution tranquille」と呼ばれることとなります。この変容は、文学の分野にも新しい動きを生み出しました。つまり、この時期以降、それまで軽蔑・蔑視の対象であったフランス語、特に「Joual」と呼ばれたケベックのフランス語が、様々な形で、文

学、映画、演劇に登場することになったのです。ここでいう、「Joual」とは、ケベック住民が「馬 cheval」を「joual」としか発音できないという「偏見」から生じた、ある種の差別語だったといえます。芸術家たちは、この否定的部分を逆にナショナリズムに利用したわけです。（ネグリチュード運動やフェミニズム運動の理念との共通性？）この社会的変容の勢に乗って、1967年にはモントリオール万博が、1976年にはモントリオール・オリンピックが開催されました。

さらに、現在のケベック社会に最も大きな影響をもたらす法案が、オリンピックの翌年1977年に採択されることとなります。「101法」、別名「フランス語憲章」です。この法律はケベックのフランス語に決定的な地位を与えることとなります。すなわち、「二言語主義 bilinguisme」（1969年）を採用しつつ、実質は「英語主義」を取るカナダ連邦に対して、ケベック政府はフランス語の「単一言語主義 unilinguisme」を取るようになるのです。

この言語憲章は極めて徹底したもので、街中の看板が全てフランス語のみの表記にかわり、また教育、行政などの言語も、第一にフランス語であることが定められました。一時は、この法律は、全体主義的、あるいはファシストであると非難されもし、また現在もそのような批判は少なからず存在します。ただ現在は、紆余曲折を得て、当時と比べれば、もう少し緩い適用となっています。しかしそれでも、この法律の衝撃は極めて大きかったといえます。その証拠に、1977年以降、イギリスやアメリカ系企業がケベックから大量に流出してしまい、経済的に大きな打撃を被ることにもなりました。その結果、ケベックの経済的中心地はモントリオールから、トロントへと移動することになってしまいました。いずれにせよ、この法律により、括弧付きの「フランス語」が、ケベック・ナショナリズムの根幹を成すことが、明示的に宣言されたわけです。

このような第三の「ナショナリズム」の運動は、カナダ連邦からの分離独立論をも先導することになりました。その結果、1980年と1995年には国民投票が行われ、ケベックの独立を国民に問うこととなります。しかしながら、結局、いずれの場合も否決され、現在に至っています。とはいえ、カナダ連邦政府は、2006年に、ケベック州が一つの「Nation」であることを承認しており、カナダの中で極めて特異な地位をもつ州であるといえます。

以上がケベック社会の極めて大まかな歴史です。歴史的概観を終えるにあたって、一言付け加えておきたいのは、今日の発表では、「英語」と「フランス語」以外を母語とする、もう一人のケベック社会の構成員たる「アロフォン allophone」については、全く触れることが出来なかったという点です。ケベックの「言語もしくは文化の三極構造」（真田桂子氏、『ケベックを知るための54章』、321頁～327頁）の一角を成すと言われる「アロフォン」の人々が、現在のケベック文化のダイナミズムに及ぼしている影響は、無視できないほど大きいということだけ、ここでは付け加えておきます。

## II ケベック・フランス語／ケベック語の文法

さて、以上のような社会的・歴史的コンテクストを前提としながら、これからは具体的にケベック語の文法を検討したいと思います。そのために、みなさんにはまず、「ケベック語がいかなるものなのか」を、3つの例を通して「感じ取って」頂きたいと思います。まだ、「頭で理解する」必要はありませんので、簡単に耳慣らしをして頂きます。これら例を見て聞いて頂いてから、簡単なが、ケベック語の文法の解説を行いたいと思います。

これからは資料4、5、6をご覧になりながら、お聞きください。まず始めに、ごく簡単に新聞漫画を見て頂き（資料4：Gilles Charest, p. 71, p. 79, p. 82.）、次に「標準フランス語話者」によるケベック語のものまねの映像を見て頂きます（資料5：Youtube内のGadによるものまね映像、発話内容を転写した原稿）。最後に、ケベック映画の一シーンを見て頂きます（資料6：Bon Cop Bad Copの1シーン、発話内容を転写した原稿）。少し分量がありますが、ケベック語の響きや社会的価値を「体感」して頂くためにも、しばらくの間、ご辛抱をお願いいたします。日本語への翻訳は、時間の都合上、新聞漫画のみ行います。また、資料5のものまねの転写に際しては、モントリオール大学学生Eric Richard氏の協力のもと行いました。

例を見ていただく前に、一つご理解いただきたい重要な点があります。それというのも、端的に言って、ケベック・フランス語の「表記」は不統一であるということです。まずは、ケベック語独特の発音を無視して、標準フランス語の表記しかなされない場合がほとんどという状況があります。次に、ケベック語を真摯に表記しようとする、フランス語圏カリブ海諸島のクレオール語と同じく、どうしても「音声に従った表記 transcription phonétique」になってしまうという点です。つまり、私の知っている限りでは、必ずしも表記上の統一がなされていないのが現状です。発表に際して、私の方で、出来るだけ表記上の統一をしたつもりではありますが、これから見て頂く3つの文章にも不統一が現れる場合があります。あらかじめ、ご了承ください。

## 1. ケベック・フランス語の例

### a) 新聞漫画

まずは、資料4（資料4：Gilles Charest, p. 71, p. 79, p. 82.）をご覧ください。ここに掲載した新聞漫画は、それぞれがケベックのフランス語の置かれた状況を、よく表現していると思います。一つ目（p. 71）は「ケベック語が標準フランス語に矯正される場面」を描いたもの、二つ目（p. 79）は「ケベック人とパリ人の表面だけ取り繕った関係」を描いたものです。三つ目（p. 82）は、「ケベック人の憂さ晴らしの方法としての罵り言葉」を描いたものです。ここでは、一つ目だけを翻訳しながら、簡単に見ていきます。やや無理のある翻訳かも知れませんが、残りの二つは、後ほどお楽しみください。（以下、セリフ部分のみ引用。）

*La Langue officielle*

A : Qu'est-ce vous en pensez vous de...

B : Que pensez-vous de...

A : Hein ?

B : Comment.

A : C...sss ! (Crisse.)

B : ...st (Christ.)

A : Coute chose...

B : Non, écoute.

A : OK ! D'abord, j'dis pu rien pantoute.

B : Je NE dis PLUS rien DU tout.

A : J'y dis ou j'y dis pas ?

『公の言語』

A: それについて、あなたどう考えてるんですか、それについて？

B: あなたは、それについてどうお考えですか？

A: えっ？

B: なんですか？

A: クリス！（罵り語の一種）

B: クリスト。

A: ちょっとは聞けよ…。

B: いいや、聞いてください。

A: よし！そうくるなら、俺はもう何んも言わねえぞ。

B: 私はもう何も言いません。

A: 言うべきか、それとも、言わざるべきか？

一見して分かるように、ケベックのフランス語と呼ばれるものの一つの特徴は、極めて口語的であるという点にあります。耳で聞いた場合、理解するのは極めて困難ですが、文字に起こすと何となく分かるのです。それ故に、表記法もなかなか定まらない訳です。確かに多くの場合は、フランス本国においても通じる言葉ではあるものの、一部にはケベック独自の語彙や表現も存在しています。例えば、*Crisse* は *Christ* という単語から派生した罵倒語の一種であり、また *D'abord* は「始めに」という標準フランス語的な意味ではなく、「その場合 *dans ce cas-là / si c'est le cas*」という意味をもった熟語です。

**b) 「Gad、ケベック語を話す」(2分)**

次に資料 5 をご覧ください。これから見て頂く映像は、ケベックのテレビ番組の一部分です。Gad というモロッコ系フランス人のコメディアンが、司会者にケベック語のものまねをしてくれと頼まれ、途中でものまねを始めます。彼は、基本的には「標準フランス語」を話すフランス人ですが、ケベック人にとっても、彼のものまねは相当上手いそうです。この映像では、ものまねが始まる前と後とでの、発音の差に注目してください。ここでは日本語への翻訳は行いません。(以下では、ものまね部分の転写のみ引用。)

**Éric Salvail :** (*Rire*) Mais j'aimerais qu'tu m'parles en québécois, parce que tu... Julie nous disait comment tu l'maîtrisais bien.

**Gad Elmaleh<sup>1</sup>:** Moé là j'pense qu'en tant qu'artiste québécois..., j'pense que chuis (=je suis) capab d'aider ce jeune<sup>2</sup>, Martin Matte... Facque là à man' né<sup>3</sup> quand le gâ (=gars) y (=il) va vouloir faire carri<sup>a</sup>ère, là tsé (=tu sais), qu'à man' né le gâ y va voulwer (=vouloir) y aller.

**Éric Salvail :** C'est bon !

**Gad Elmaleh :** Quand (c'est) qu'le gâ y va, y va vouloir n'n'awe (=en avoir) tsé... Facque moi..., moi là j'va l'we (=voir) Martin Matte, pis j'va dire : « là, t'es s'posé (=supposé) n'n'avoir du pouvwe (=pouvoir) dans l'*show business*. » Pis là, lui y (=il) va m'dire : « Mais,

<sup>1</sup> Il imite l'accent québécois à 85%, mais tombe facilement dans l'imitation; ce qui n'est pas naturel. (Note par Éric Richard)

<sup>2</sup> Il prononce très mal le mot « jeune » et prononce davantage comme le mot « gêne ». (Note par Éric Richard)

<sup>3</sup> Litt. : Ça fait que là, à un moment donné. (Note par Éric Richard)

tu penses que j'suis s'posé n'n'awe ? » *J'm'a dire* (=Je m'en vais lui dire), ben mon gâ, m'à dire une affaire, même une coupe d'affaires... C'est qu'on va faire son show en France. Moé là j'suis son producteur... j'suis québécois, j'habite à...

**Martin Matte** : ... Au Saguenay.

**Gad Elmaleh** : Ah ! Lac-Saint-'han.<sup>4</sup>

**Martin Matte** : Y r'connait ben.<sup>5</sup>

**Gad Elmaleh** : Lac-Saint-'han.

**Éric Salvail** : Mais c'est bien !

お聞きになると分かりますように、「標準フランス語」には似ても似つかない発音が多かったと思います。転写の際に協力を頂いたケベック出身学生 Éric Richard 氏によると、少し発音の異なる部分もあるようですが、基本的には許容範囲だそうです。また、show や show-business など英語からの単語の借用も耳にされたと思います。これは、一方では或る意味でケベック語の巨大な活力であり、しかし他方では、その急激な増加が危惧もされている Anglicisme の典型的な例です。Anglicisme とは、「英語からの借用」を意味します。(補足 : かつて言語学者の Etienne は、このような英語からの借用を多く含んだフランス語を「フランス英語 *franglais*」と呼び、その様な言語使用を批判しました。)

### c) 『ボン・コップ、バッド・コップ』からの抜粋 (5分)

次に最後の動画ですが、資料 6をご覧ください。Bon Cop Bad Cop というケベック映画の 1 シーンです。物語は次のようなものです。「オンタリオ州出身の英語話者の警官 Martin Ward」と「モントリオール出身のフランス語話者の警官 David Bouchard」が、州境で見つかった死体を発端として、不承不承、協力して事件解決に挑むというものです。2006 年に公開され、カナダ映画史上最も売れた映画です。本作は日本でも発売されましたが、何故か『ブレイキング・コップス』という「素敵な」題名に変わってしまいました。また私の知る限り、フランス本土での劇場公開はなかったと聞いています。ここでも翻訳はしません。英語とフランス語が入り乱れますが、発音や Anglicisme に注意しながら、お聞き下さい。(以下に、資料の全体を引用。)

**David Bouchard** : Hostie de c<sup>h</sup>alice de tabarnak ! *C'est qui qui* s'est occupé d<sup>z</sup>u barrauge ? Ça m'a pris d<sup>g</sup>eux h<sup>a</sup>eurs pour me rendre sur ma scène de crime !

**Homme A** : Hein oui, mais là, Dave, come on...

**Bouchard** : Pour t<sup>w</sup>e (=toi), aujourd'hui, c'est détect<sup>s</sup>ive Dave.

---

**Martin Ward** : Martin Ward (*avec l'accent anglais*)

**Bouchard** : David Bouchard (*en imitant l'accent anglais*)

**Ward** : Enchanté.

**Bouchard** : « En-chan-té ! » (*en imitant Martin*) Hé, on est tombés sur un gars qui p<sup>a</sup>eut parler le français !

**Deux hommes** : (*Ricanements*)

**Bouchard** : I guess he's the victim ?

**Ward** : We can't classify him as a victim yet, but we can say he's had a bit of rough night. Not much blood, though.

**Bouchard** : En t<sup>s</sup>out (=tout) cas..., ça m'a fait plaisir. Bonne chance, les boys.

**Ward** : Hey... where're you going ?

**Bouchard** : Chez nous. This is obviously your case.

---

<sup>4</sup> Imitation de l'accent de la région du Saguenay-Lac-Saint-Jean où le *J* dans « Lac-Saint-Jean » est expiré jusqu'à n'en plus entendre le son *J*. (Note par Éric Richard)

<sup>5</sup> Litt : Il reconnaît bien l'accent du Lac-Saint-Jean. (Note par Éric Richard)



**Ward** : What do you mean, « our case » ? It's very clearly your case !

**Bouchard** : How do you figure that ? His feet are on your side.

**Ward** : Exactly. His head is on your side. What's your point ?

**Bouchard** : My point ? If you play football or tennis or whatever, you step over the line, you're out.

OK, les boys, on n'a pu (=plus) rien à faire icitte (=ici)... on décrisse (=on s'en va)...

**Ward** : May I remind you that in the 100-yard-dash, it's the head and chest that break the tape. In horse racing, it's by a nose..... As you can see, the subject was a true Quebecer.

**Bouchard** : C'est quwe (=quoi), do I need a passport ?

**Ward** : His heart is in Quebec.

**Bouchard** : Ah... Il a l'Ontario dans le cul, aussi. (*Rires*)

**Ward** : Excuse me ?

**Bouchard** : I just said his ass belongs to you.

**Ward** : Okay... We'll take it from here. Get me a laddar.

**Bouchard** : Une échelle !

**Homme A** : Une échelle, Go !

---

**Ward** : Wô... Don't move him.

**Bouchard** : M'as-tu vu, je le bouge ? (? *indistinct*) Il est encastré dans la pancarte.

**Ward** : Never mind. Let's just get this over with.

**Bouchard** : What's this ?

**Ward** : Be careful not to move anything... Oh, Hey !!

**Bouchard** : Oh, shit...

**Ward** : Idiot !

---

**Ward** : Good morning.

**Bouchard** : Hey, nice turtleneck. It's really you. Que c'est qu'il câulice icitte (=ici), la tête caurrée ?

**Capitaine LeBœuf** : Bouchard, tu connais Martin ? Je te présente Brian MacDuff, le chef de la Sûreté de l'Ontario.

**MacDuff** : Pleasure to meet you.

**Bouchard** : C'est câ, oui. J'peux savoir ce que j'fais encore icitte, à cette haure-là, à matin, hein ?

**LeBœuf** : Euh... You wanna talk to... Brian ?

**MacDuff** : No, no, no, it's your jurisdiction.

**LeBœuf** : No ! No, no, I « h'insist ».

**MacDuff** : Okay... We know that the victim is from Montreal...

**LeBœuf** : On sait !...que la victime... est de Montréal...

**MacDuff** : We don't know for sure yet if it's a murder and if it is, where the... ah... murder victim comes from.

**LeBœuf** : On n'est pas certains encore que... c'est un meurtre... et si c'est le... cas... d'où vient..... le meurtrier...

**MacDuff** : And so, ah... capitain LeBœuf and I, we thought it was a great opportunity.

**LeBœuf** : Et on pensaient, le capitaine LeBœuf et moi, que c'était... une belle... « opportunity » de... de...

**Bouchard** : OK, ça va, chef. J'comprends l'anglais.

**LeBœuf** : Ah ben, ouais, OK. Ah... It's OK... David... he can English... he can English... He can...

**MacDuff** : Oh, oh ! OK, go ahead...

**LeBœuf** : OK, OK, I go, I go... So euh, we thought it was good « h'oppotun... »... it was...

**MacDuff** : « Oppotunity ».

**LeBœuf** : it was good... « h' o, h'o... »...

**MacDuff** : « Oppotunity ».

**LeBœuf** : « h'opportunity »... to be... ah...

**Ward** : Vous pouvez parler français, capitaine.

**LeBœuf** : Oh, mais cibwere (=ciboire) !

**Bouchard** : Tsu parles français, twe ?

**Ward** : Non, je parle pas français. Je me suis fait installer un petit gadget au cerveau. And I see subtitles under people when they speak... Oui, je parle français. J'étais en français enrichi à



話をケベックに限れば、この点で非常に興味深い資料体として挙げられるのは、ジャック・ゴドブー著、小畑精和氏翻訳の『やあ、ガラルノー』（1967年初出、1998年翻訳）です。この小説は極めて口語的なケベック語表現で物語が描かれています。訳者はそれを「関西弁」で翻訳しました。どうして標準日本語ではなく、関西弁で訳したのか？ 関西弁という選択は、いかなる判断のもとになされているのか？ また、関西弁以外の可能性はなかったのか？ あるとしたら、いかなる言葉をいかなる態度で選択するのか？ 以上のような問いを考察することで、原文ではなく、むしろ翻訳文献の読解から、フランス語圏文学が抱える言語選択の問題を、より身近に検討することが可能になるとおもわれます。）

さて、ここまで3つの異なる例を実際に見て聞いて頂きました。何となく「ケベック・フランス語」と「標準フランス語」の違いが、呑み込めたのではないかと思います。これからは、より細かくケベック・フランス語の文法を検討していきたい思います。主に、資料7（以下に全文を引用、主に *Le Québécois pour mieux voyager* と Jay Hogue を参照）をご覧になりながら、お聞きください。当然ながら、全ての文法的特徴を提示した訳ではありません。

## 2. 発音 (主に *Le Québécois pour mieux voyager* (dans la série *Ulysse*), 2004 を参照)

### a) 母音

まずは、最も興味深いと思われる「母音」から検討していきましょう。主な特徴は5つあります。ただし、子音の場合もそうですが、以下に示す音韻変化は全ての単語に起こる訳ではなく、現実には、変化を起こさない単語、つまり標準フランス語と混じっている場合がほとんどであることを付け加えておきます。

— 閉音が開音へ（一部は17世紀パリにて使用）

i [i]→[é] : crime [créme], ligne [légne], pic [péc]

u [y]→[eu] : jupe [jœpe], Luc [Lœc], puce [pœce]

ou [u]→[au] : soupe [saupe], foule [faule]

a [a]→[o] : Canada [Canadâ], taba [tabâ], ça [çâ] ex) C'est çâ.

è [ɔ]→[a] : jamais [jama], parfait [parfa], ballet ou balai [bala], merci [marci]

— 長母音の存在（フランス本土では既に「消失」→音声学的意味の喪失→長短区別無  
pâte [paoute] – patte, fête [fête] – faites, jeûne [jeune] – jeune, 阿部先生からのコメント)  
paume [paoume] – pomme

ex) C'est la fête [fête]. /

lâche [laouche], passe [paousse], neige [naége]

ex) Qu'est-ce qui se paousse ? / Est-ce qu'il naége ?

r の前 : tard [taourd], rivière [riviaére], encore [encaoure]

ex) Vous êtes encaoure là ? / C'est trop taourd.

— oi の変化（かなり口語的、砕けた表現でのみ）

[è] : droit ou droite [drète], froid [frète]

[wé] : boire [bwé], moi [mwé]

[wè] : boîter [bwêter]

[wê] : déboîter [débwêter]

[wâ] : bois [bwâ]

[waê] : boîte [bwaête] ex) « Le rwé, c'est mwé ? » (Louis XIV) (?)

— 鼻母音 : un の発音の明確化 (フランス本土ではほぼ消失)

brun / brin : フランスではほぼ同じ発音。ケベックでは区別する場合がある。

## b) 子音

次に、「子音」に関して見ていきたいと思います。主な特徴は、6 点あります。簡単にではありますが、順に見ていきます。

— t と d の発音の変化 (i, u, y の前での発音、17 世紀ナント地方に使用)

petit [petsi], peinturer [peintsurer]

direct [dzirect], durable [dzurable]

type [tsype], typique [tsypique]

— r の発音の多様性

巻き舌で鳴らす、喉で鳴らす (標準に近い)、軽微に喉で鳴らす

語頭の r の音の前に e を入れる : recule [ercule], regarde [ergarde]

— l の発音

il(s) と elle(s) の発音の変化 : il ou ils [y] ex) Y pârt demain. / Y sont bons.

elle ou elles [à] ou [è] ex) À part demain. / È bonne.

il(s) と elle(s) の消失 : (Ils) Sont bons. / (Il) Faut faire çâ.

le, la, les の消失 : Je suis dans' maison. (dans la maison)

le, la, les と dans, sur などとの縮約 : J'ai de l'eau dins yeux. (J'ai de l'eau dans les yeux.) / Mets çâ sa' table. (Mets çâ sur la table.)

— l, r, t の消失

quelque [què'que] ou [quèk] ; quelqu'un [quéqu'un] ex) Voulez-vous quèk chose ?

mettre [mette] ; regarde [r'gade] ou [ga'] ex) Veux-tsu mette çâ lâ ? / Ga' comme y'é beau !

doit être [dwaêt']

— w の発音 (ベルギーと同じく)

wagon [ouagon] (標準フランス語のように [vagon] ではない)

— 語尾の子音字の発音 (アンジュー地方やトゥレーヌ地方にて使用)

lit [litte], nuit [nuitte], pot [potte], bout [boutte], fait [faiite], français [française] (?)

ex) tout à faiite, à nuitte, pas du toutte [pantoute となる], Je n'ai rien faiite.

最後に、子音と母音双方に関わる現象ですが、音の省略や縮約が多いという点も特徴の一つとしてあげられます。この点は、これまでに挙げた例を見て頂いても、お分かり頂けたかと思います。

— 省略や縮約が多い。

cette école-là → sté kâl lâ, cette rue-là → sté ru lâ, bien → bein, à la maison → à' maison, sur la rue → sa' rue, dans un tiroir → dun' tiroér

このようにケベックのフランス語における母音や子音は、古いパリ・フランス語やフラン

ス方言の音を保持している場合があります。ただし、その真偽のほどは、まだ私自身調べきれていません。彼らが、このように古いフランス語とのつながりを強調することは、私には或る種の「ケベック・ナショナリズム」の発露の仕方にも思えます。

### c) 英語からの借用

発音編の最後に、ごく簡単に英語からの借用語について述べておきます。先ほど述べましたように、ケベック語は英語との葛藤の中で、「生き残り」をかけて、様々な方策を取ってきました。しかし、実生活上の必要にせまられ、英語を使用する場面は日本よりも遥かに多いと言えます。その結果、ケベック・フランス語には、英単語が様々な形で借用されています。その際に、つづりはほぼ同じだとしても、発音はフランス語化されることが多いように思います。

例えば、次のような英単語は、ケベック・フランス語においては、ほぼ日常語となった言語です。

ex) tchècker < to check, smatte < smart, foquer < to fuck, tsip < tip, (tchèque < cheque ou check), foule < full, brêiker < to brake, ènéoué < anyway etc

## 3. 語彙

さて、次に語彙を見ていきたいと思います。先ほど見て頂いた例文の中や、また発音を検討する過程で、すでに幾つもの単語は見てきました。ここでは、主に4つの特徴から、ケベック・フランス語の語彙を見ていきます。当然ながら、標準フランス語で用いられる語彙も、ケベック・フランス語で使用可能です。

### a) ケベック固有の語と熟語

— 名詞、形容詞、副詞

poutine, pâté chinois, char – voiture, pamphlet – brochure, piastre/piasse – dollar, sous/cennes – cent (en anglais), chandail – Tシャツ、セーター, norouâ – 北西風, sudet – 南西風, bleuet – ブルーベリー, dactylo – machine à écrire, rendu – arrivé, kétaine – de mauvais goût, frête – froid, icitte – ici

— 動詞

pogner – attraper/saisir/tripoter, jaser – causer/bavarder, magasiner – faire des courses, embarquer/débarquer – monter/descendre, déjeuner/dîner/souper – petit-déjeuner/déjeuner/dîner, garrocher – lancer, sauver – économiser/gagner

— 熟語

astheure – à cette heure, au plus sacrant – aussi vite que possible, en masse de/en tsitsi de – beaucoup de, avoir de la misère – avoir de la difficulté, être tanné – en avoir assez, à matin/à soir – ce matin/ce soir, par exemple – par contre, un m’man’n’é – à un moment donné, d’abord – si c’est comme ça

b) 罵り言葉 (近年まで、60年代の社会変容が起きるまではカトリック教会の力が強く、その反発で宗教用語からの転用が多い。補足：罵倒語になる単語の変容における一段階か？例えば、「宗教語→性交・性器に関わる語→糞便に関わる語→…」など。翠川先生からのコメント)

— 間投詞

baptême/batèche, câouliss < calice (聖杯), calvaire/calvette/calvinus/calvénu/s/joualver, ciboire/cibwêre/câlibwêre, criss/cliss/crime < christ, maudzi/maudit, ostie/ 'stie/esti/ostinâtion < hostie (聖体), sacrament, simonac, tabarnak < tabernacle (聖櫃)

— 動詞

foquer – fuck, décrisser/câlisser son camp – partir, câlisser une volée – donner une raclée

c) 名詞の女性化

— 特に、役職名 (証明書や学校の通告など公的文書でも、男女両方を必ず記述する)

professeur – professeure, docteur – docteure, ingénieur – ingénieure, auteur – auteure, le ministre – la ministre

d) 英語からの借用

— 名詞、形容詞：英語からの単純な借用

party – soirée, tour – excursion, boss – patron/supérieur, break – pause, tire – pneu, staff – personnel/équipe, call – appel, cô'te – coat, caméra – appareil photo, le fin – fun, strêit – straight (hétérosexuel), kyou'te – cute, taîte – tight

— 動詞：英語に接尾辞をつけたもの

filer – to feel (sentir), bréiker – to break (freiner), watcher – to watch (surveiller), toaster – to toast (faire griller), maller – to mail (poster), gô'ler – to goal, ronner – run, troster – trust, canceller – to cancel (annuler)

— 英語から翻訳借用(calque)したもの

melon d'eau – water melon (pastèque), chambre de bain – bathroom (salle de bain), vente – sale (solde), comiques – comics (bandes dessinées), donner une commande – to give an order (commander), centre d'achat – shopping center (centre commercial), chercher pour – to look for, bienvenue – welcome (De rien. / Il n'y a pas de quoi. / Je vous en prie.), C'est correct. – That's correct. (C'est bon. / D'accord.)

#### 4. 統辞

最後に、これまで見てきた発音と語彙を参考にしながら、ケベック・フランス語の「統辞」に関して簡単に見ていきたいと思います。今日は主に5つの特徴から検討していきます。

##### a) vouvoyer か tutoyer か？

まず始めに、標準フランス語を学んだ人間にとって、ケベックで最も驚く表現の一つは、vouvoyer と tutoyer の区分だだと思います。みなさんご存じのように、フランス語でも緩やかながら「敬語」があり、その代表格が vous という人称代名詞と考えられます。ところが、ケベックではこの敬語的な vous の使用は、日常言語では必須であるとはいえません。例えば、若者同士では tutoyer が主流で、また大学内で先生に向かって tutoyer する学生もいます。メヴェル先生（東北大学助教授）がよく引き合いに出す逸話では、タクシーの運転手も乗客に対して tutoyer する場合があります。

とはいえ、高等教育を受けた人たちや、フランスのフランス語を教え込まれた人たちは、標準フランス語と同じく vous と tu の区別をしっかりとしています。現実には、出自や社会階層、また教育レベルなどによって、「純粋な」ケベック・フランス語を話す人は、かなり偏っていると考えるのが妥当です。ちなみに、ケベックには parler en bon français ならぬ、parler en bon québécois という表現も存在します。(補足：you だけしかない英語からの影響が

大きいのではないか？それとも、ケベック独特か？複数言語の敬語表現の比較は興味深いだろう。(阿部先生、翠川先生、宮本さんからのコメント。)

#### b) -ti = -tsi / -tu = -tsu

次に取り上げたいのは、疑問形に現れる-tsi あるいは-tsu という音です。多くは疑問文の語尾に現れますが、そうでない場合もあります。これも初めて聞く人には、かなり奇異な感じを与える表現です。例えば次のように現れます。

ex) Tsu comprends-tsu ? / Tsu m'aimes-tsu ? / Vous venez-tsu ? / Je peux-tsu ? / Il a-tsu mangé ? / Elle est-tsu partie ?

ここに現れる-tsu あるいは-tsi という音は、人称代名詞の tu とは異なるもので、全く文法的な意味を失ったものです。単に、リズムを合わせるために挿入しているようにも思えます。

語源的には、この-tsi/-tsu という音は、倒置疑問文の語尾から来たのではないかといわれています。例えば、Dort-il ? という音が Dor-ti' ? となり、Dor-tu ? と変化し、この語尾の音だけが残存したとされています。また、ノルマンディ出身のフランス人の友人に聞いたところによると、この表現はノルマンディ地方に住む高齢者が使う表現でもあるようです。歴史的概観で少し触れましたが、カナダへの最初の植民者のほとんどがフランス北西部出身でした。つまり、この表現はケベックで生まれたのではなく、フランスの古い地方語が輸入され、生き残った結果と言えるかも知れません。

#### c) 疑問文

次に、より細かく疑問文を見ていきます。ケベック語の疑問文は、基本的には標準フランス語と変わりません。しかし、特に省略や縮約によって、発音が大きく異なります。主に4つの疑問詞に注目して検討します。

— Qu'est-ce que : « kès » (même en France)

« ke-sék » (au Québec) : qu'est-ce que c'est que

« kâ-sék » (au Québec) : quoi c'est que / c'est quoi que

ex) Qu'est-ce que tu veux ? – Ke sék tu veu ? / Kâ sék tu veu ?

— Qui est-ce qui : « ki sé ki » : qui c'est qui

« sé ki ki » : c'est qui qui

ex) Qui est-ce qui est parti le dernier ?

– Ki sé kié parti le dernié ? / Sé ki kié parti le dernié ?

— Où est-ce que : « ous ke » / « ou sék » : où est ce que c'est que

ex) Où est-ce que tu as appris ça ? – Ous ke t'â appris çâ ? / Ou sék t'â appris çâ ?

— Quand est-ce que : « kan sék » : quand c'est que / c'est quand que

ex) Quand est-ce qu'il va arriver ? – Kan sé qu'i' vâ arrivé ?

このように発音だけを聞くと、最初は何を言っているのか分からないほどです。聞き取ることが出来ましたでしょうか？疑問文は日常的に使用される表現ですが、ケベック・フランス語の中でも、耳が慣れるまでかなりの時間と労力が必要とされる部分でもあります。

#### d) 命令法

次に命令文に移りたいと思います。この表現は、最も標準フランス語と「衝突」を起こす部分だと思われます。というのも、代名詞の位置が入れ替わるためです。しかも、ケベック語話者にとっても、明確ではないようで、標準フランス語と「混乱」してしまっている人も少なくありません。標準フランス語だけを学びたい学部生の方々は、特に注意して頂いて、絶対にまねをなさらないようにお願いします。

— 代名詞の位置の変化

ex) Donne-le-moi ! → Donne-moi-le ! → Donn-moé-lé !

Ne les casse pas ! → Casse-les-pas ! → Câss-lé-pâ !

— me と te が、moi/moé と toi/toé に変化

ex) Donne-m'en ! → Donne-moi-en ! → Donn-moi-(z)-en ! → Donn-moé-(z)-en !

Ne te presse pas ! → Presse-toi pas ! → Presse-toé-pâ !

— 否定辞の ne が消失

以上のように、肯定・否定命令文は、標準フランス語でも混乱しやすい部分だけに、余計に複雑なものといえます。(フランス本土でも、濫用が目立つ現象。但し、誤用として認識されているが。阿部先生よりのコメント)

#### e) 近接未来

最後に、近接未来を検討して、ケベック・フランス語の文法の検討を終わりにしたいと思います。近接未来は、ケベックの日常言語でも、非常に頻繁に用いられる表現です。

— aller の発音変化

ex) Je vais y aller. → J'vâ y aller. → J'vâ yaller.

— aller ではなく s'en aller (ロベール仏語大辞典によると、フランスにも存在する口語表現)

ex) Je m'en vais y aller. → Je m'en vâ y aller. → J'mâ yaller. → Mâ yaller.

このように、基本的には発音上の省略・縮約を通して、ケベック語独特の近接未来の表現が生まれるわけです。

#### 結論：「単数形のフランス語」から「複数形のフランス語」へ

さて、ここまで私たちは、ケベック・フランス語のコンテキストとその内実を、駆け足で見してきました。すでに消化不良を起こしている方もいらっしゃるかも知れません。今回は、少なくとも、「ケベック語」と「標準現代フランス語」とがどのように異なっているのかを、おぼろげながらにせよ、理解して頂けたら幸いです。

最後に付け加えたいのは、このようなフランス語、つまり「フランス本国の外で生きるフランス語」は、多かれ少なかれ、同様の差異や偏差を「標準現代フランス語」との間に、保持しているという点です。カリブ海域諸島のフランス語、アラブ諸地域のフランス語、またアフリカ諸地域のフランス語、それぞれが同様に、別様の多様性を持っているのです。つまり、一般にフランス共和国の言語と解される「フランス語」は、実際には必ずしもその内実を「一つで、分割不可能なもの」とはしていないのです。みなさんには、このようにフランス語とは「単数形の言語」ではなく、つねにすでに「複数形の言語」であることを、記憶に



とどめて頂けたら幸いです。(補足：あらゆる言語は「中間言語」であると考え、  
「生きた言語」のその生を把握するために必須の視点である、というような仮説立ても可能  
でしょう。)

## 参考文献、参考資料

### 仏語文献

1. Gilles Charest, *Le Livre des sacres et blasphèmes québécois* (avec illustrations de Jean-Pierre Girerd), L'Aurore, coll. « Connaissance des pays québécois », 1974.
2. Charles A. Ferguson, « Diglossia », dans *Word*, No 15, p. 325-340, 1959.
3. Lise Gauvin, article de « Surconscience linguistique », dans *Vocabulaire des études francophones*, Michel Beniamino et Lise Gauvin (dir.), Pulim, coll. « Francophonies », 2005, p.172-174.
4. Jay Hogue, documents distribués dans le cadre de séminaires « Décoder le parler québécois » et « Comprendre l'expression d'ici », Centre de Communication Écrite, l'Université de Montréal, 2009.
5. Mireille Huchon, *Le Français au temps de Jacques Cartier* (présentation de Claude La Charité), Tangence, coll. « Confluences », 2006.
6. Hélène Poulin Mignault et Gilles Six, *Le Français au Québec* (3<sup>e</sup> édition), Sodilis, coll. « Le Français oral : compréhension et expression » (Centre de français et d'anglais de l'Université McGill), 1990.
7. Charles-Alexandre Théorêt, *Maudite Poutine – l'histoire approximative d'un plat populaire*, Hélio trope, 2007.
8. *Les Acadiens louisianais et leur parler*, publié par Jay K. Ditchy, Comeau & Nadeau, 1997.
9. *Le Français au Québec – 400 ans d'histoire et de vie* (nouvelle édition), Michel Plourde et Pierre Georgeault (dir.), FIDE/Conseil supérieur de la langue française, 2008.
10. *Le Québécois pour mieux voyager*, dans la série *Guides de voyage Ulysse, le plaisir de mieux voyager*, Guides de voyage Ulysse, 2004.

### 日本語文献

11. 小畑精和・竹中豊編著, 『ケベックを知るための 54 章』, 明石書店, 叢書エリア・スタディーズ, 第 72 巻, 2009 年.
12. ジャン・ブノワ・ナドー、ジュリー・バーロウ著, 『フランス語のはなし – もうひとつの国際共通語』, 立花英裕監修, 中尾ゆかり抄訳, 大修館書店, 2008 年.

### HP・映像・動画

13. 長谷川秀樹氏 HP 内, 「プリンスエドワード島のアカディア人」, <http://www1.odn.ne.jp/cah02840/PEI/>, 最終閲覧日: 2009 年 7 月 7 日.
14. « Gad parle québécois », Youtube, <http://www.youtube.com/watch?v=REsdVaYY25w>, 最終閲覧日: 2009 年 7 月 7 日. (内容: ケベックのテレビ番組『On n'a pas toute la soirée』からの抜粋。モロッコ出身の Gad Elmaleh は、フランス本土でも人気のあるスタンダップ・コメディアンですが、十代後半をケベックで暮らしていました。)
15. « Culture en péril », Youtube, <http://www.youtube.com/watch?v=n3HVFsiQ5M4>, 最終閲覧日: 2009 年 7 月 7 日. (内容: スティーヴン・ハーパー(英語系)首相政府による文化政策に対する揶揄広告。ケベックの或る「有名」歌手が、フランスでのコンサートの資金を得るため、オタワを訪れ英語系審査官たちによる面談を受けます。ところが、誤解と齟齬で会話はほと

んど成り立たず、最後には…。ケベック州にて制作された広告であるため、英語話者に対する揶揄が著しいですが、非常に面白いです。）

16. *Bon Cop Bad Cop* (邦題『ブレイキング・コップス』), Eric Canuel 監督, 2006 年公開. (内容: カナダ映画史上、最大の興行収入を得た作品。『リーサル・ウェポン』のケベック版といえる物語設定。邦題『ブレイキング・コップス』。)